
招き猫（改）

syuuta

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

招き猫（改）

【Nコード】

N1629M

【作者名】

syutta

【あらすじ】

前の話を少し小説っぽく書き直しました。

中学校最後の夏休み、私は大人たちの勉強しなさいという言葉を見した。最後の夏休みなのだから何処かに遊びに行きたい。そう思つて私は加奈と亜季に15時に駅集合とメールを打つ。

「二人とも遅いよ」

15時集合の所を加奈と亜季は30分も遅刻した。私は少し怒っているような口調になつてしまう。

「ごめん。ちょっとバスに乗り遅れちゃって……」

加奈がこう謝りながら手を振って走ってくる。今日はいつもつけているリボンはしていなかった。珍しいな。

「まあバスに乗り遅れたのは加奈の準備に時間が掛つたせいだけだねー」

その後ろをゆっくりと歩きながら近づいてくるのが亜季である。亜季はいつだつてマイペースな子だ。時々よく分からないことを言ったりもする。

「それについては電車の中で謝つたでしょうが」

そう言つて加奈は亜季にデコピンをする。

「そつといえはそつだつた」

「遅刻の事はもういいから店に入ろう。私暑くて死にそう」
二人がいつ来るか分からなかったので外で待っていた麻里は一刻も早く涼しいところに行きたいという気持ちでいっぱいだった。

亜季がどうしても喫茶店でコーヒーが飲みたいと聞かなかったため近くにあった適当な喫茶店に入る。普段は特に意見は言わないのだが、今日はなにか良い事でもあったのだろうか。

「いらつしやいませ。2名様でしょうか？」

眼鏡を掛けた若い女の店員が軽快に人数を数え間違える。

「3人ですよ」

亜季が静かな声で訂正する。

「申し訳ございません。3名様ですね、ではあちらのテーブルにどうぞ」

私達は窓際の席に案内された。運がいい事にそこはクーラーがよく当たる場所だった。飲み物を注文し雑談を始める。海や山に行こう、遊園地に行こうなどと色々話したが亜季の肝試しをしてみたいという発言から話の方向がそれてしまう。

「うちの学校には七不思議ってないのかな？」

私はふとこんな事を思い口に出してしまう。

「あるわけないでしょ。うちの学校出来たの結構最近じゃん」

加奈が全面的に否定する。こう否定されるとどうしても反論したくなる。

「そんなの調べてみなきゃ分からないよーねえ亜季？」

亜季は私達の中では一番頭がよくいろんなことを知っている。その亜季ならばと思い助けを求めた。

「私、放課後の女子トイレで女の人の泣いてる声聞いたことあるよ」
亜季はあまりこつこつという話に興味がないのかいつもより一段と静かな
声で話している。

「それで？」

私はさすが亜季と思いながら続きを話すよう相槌をうつ。

「誰かいるんですかって声をかけたら……」

「うん」

「担任の小夜先生が『彼氏にふられたー』って言いながら出てきた」

「……それ怪談じゃなくね？」

やっぱり亜季は少しずれている、改めて麻里はそう思った。

「駄目だなー亜季は、私が友達から聞いたとおきの怪談でお手
本を見せてやろう」

加奈が大きな声でこつこついった。少しは周りの迷惑も考えて喋ってほ
しいものだ。一緒にいるこつこちが恥ずかしい。

「おほん。この話は友達から聞いた話なんだけど……」

「その人の家の近くに大きい山があるの、名前は……まあ忘れたけ
ど。で、その山の入り口で三毛猫を見かけたんだってその猫はなん
と……」

「なんと？」

私は少し面倒だったが一応相槌を打った。

「30万の賞金が掛った探し猫だったんだって、もうこれは捕まえるしかないと思ってさ猫を追いかけて山に入った。」

「でもやっぱり猫の方が速いでしょ。全然追いつけなくて見失いそうだったんだけど途中で猫が捕まえてみると言わんばかりに止まったりして結構山奥まで追いかけてしまったのよ」

「まあ最終的に見失っちゃって仕方がないから帰ることにしたの。でも、その時後ろの方から声が聞こえた……」

「どんな？」

加奈にしてはえらく集中して喋っているの少し関心してしまう。コーヒーに全く手をつけていないのは砂糖が入ってないからだろう。加奈は苦いものは苦手なのだ。話を中断してとってくればいいのに

「『私に何か用』って女の人の声。でも周りを見渡しても誰もいない。怖くなってその場から立ち去ろうとしたら、茂みが動いたの」

「びつくりしてかたまってたさっきまで追いかけてた猫だったから捕まえようとしやがんだわけ、そしたら今度ははつきりとした声で『質問には答えないの』って聞こえたの」

「もしかして猫から？」

亜季は黙って聞いているのでもしかしたら寝たのかな等と麻里は考える。

「そう。すごく怖くなって猫は放っておいて走って逃げた……」

「それあれだ……確か猫の質問に答えると二度と家には帰れないってやつでしょ？」

飽きたのでさきに結末をいう。普通怒るだろうが加奈はこの程度気にしないだろう。

「そんな話があるんだ」

ここにきて亜季が初めて口をはさむ。

「ふつたりともー何してるの？喫茶店なんかで窓の外から美穂が話しかけてくる。」

「もー美穂まで何言ってるの？3人いるでしょ？」
みんな暑いから頭がぼけているのだろうか？

「えー、だって麻里と亜季以外いないじゃん」

そう言われて加奈がいるはずの席を見る。コーヒーはあったが加奈の姿は見当たらなかった。トイレにでも言っているのだろうか。

「亜季、加奈はトイレにでもいったの？」

「分からない。美穂の方を見た後にはもういなかった」

「電話するしかないね」

麻里は携帯を取り出し加奈に電話をかける。しかし、電話は繋がらなかった。

「加奈って……ホントにさっきまで加奈がいたの？」
美穂が驚いたような声を出す。

「いたよ、何かあったの？」

「加奈は昨日から連絡がつかなくなって今日両親が搜索願いだしたんだよ……」

「えっ、じゃあさっきまでいたのは誰？」

加奈が行方不明……そんな話は初めて聞いた。

「さっきの話みたいに加奈の家の近くに山はある？」

亜季が何やら深刻な顔をしていた。まさか加奈が山にいとでもいるのだろうか？

「多分あるよ。」

私は加奈の家にはあまりいった事がなかったが記憶が確かならあったはずだ。というか私の質問は無視かよ。相変わらずマイペースだ。

「でも山はもう警察が捜査したはずだよ」

美穂はかなり情報を持っているようで私は少し不思議に思う。

「山に行けば何か分かるかも知れない」

亜季はいつになく真剣な表情だった。

私達は喫茶店を出て電車に乗り加奈の家に向かう。もう6時になるがあたりはまだ明るい。今が夏でよかった。暗くなつては山に入る事ができなくなる。

午後6時30分頃、加奈の家近くの山についた。さてここからどうすればいいのか。亜季の言うとおり山にはきたがすでに警察が調べたのなら私たちが調べる意味はないのではないだろうか。私はそんなことを考えていた。

「亜季、これからどうするの？」

「さっきの話が本当ならあの猫についていけば何かわかるかも」
亜季から感じる雰囲気少し違う、私はそんな気がした。

猫についていく、果たしてそれで加奈の所に行けるか分からない。けどそれ以外出来ることが思い浮かばなかったため私たちは3人で猫を追いかけ始めた。携帯を見ると時間は6時40分暗くなるまであまり時間がない。追いかけて始めて30分はたっただろうか。道はかなり険しくなってきた。猫は話どうり止まりながら先に進んでいく。

「ねえ亜季、このまま追いかけていくと私達も加奈みたいに……」
加奈の事は心配だったがそれを助けにいつて自分たちまで行方不明になってしまつては元も子もない、私はそう思った。

「大丈夫」

亜季はやけに自信がありそうだった。

「なんでそういえるの？」

「猫にはこれが一番だよ」

亜季はそういつてマタタビを取り出す。

「幽霊にそんなもの聞くのかな……」
美穂が心配そうな声をだした。

「幽霊なんていない。それより猫はどこ行つたの」
亜季に言われて気がつく、猫はいつの間にかいなかった。まずいこのままでは本当に……

「さっきの話からすると、猫に質問させなければいいのだよ」
亜季はマタタビを振り回し始めた。

すると、先ほど追っていた猫だけではなく他にもかなりの数の猫が出てきた。どうやら近くに隠れていたようだ。亜季は持っているマタタビをすべて取り出し振り回す。

「い、今のうちに加奈をさがしてー」

やっぱり亜季はズレているような、そんなことを思いながら麻里と美穂は加奈を探す。

「麻里達まだかな。そろそろきついんだけど……」

あれから10分くらいたったかな？猫たちは相変わらずマタタビにご執心のような。早くしてくれないと疲れるな。

「あれ？」

今までと何かが違うと亜季は感じた。何が違う？……もしかして猫の動きが止まりだした

よく見ると最初のころに比べマタタビに対する反応が薄くなっている。

「もしかして、飽きたのかな……」

麻里早くしてよ。

いない、どこを探しても。山が広すぎる、たったの三人ではやはり無理だったのか。いったん亜季の所に戻ろう、そう思っただけ。しかし、亜季の姿は見当たらなかった。それどころか猫の姿さえ見えない。

「まさか亜季まで」

「麻里……」

声が聞こえたので麻里は振り返る。すると、そこには美穂が立っていた。

「なに？」

雰囲気が違う気がした。本当に美穂だろうか

「麻里と亜季ってかなり馬鹿だね」

「今そんな事言ってる場合じゃないでしょ」

麻里は加奈の搜索を再開しようとする。

「だってもう死んだ人間を探そうっていうんだから」

美穂は静かに笑う。その笑みからはいつもとは違う何か得体の知れない恐怖を感じた。

「それってどういう意味？」

死んだ？行方不明ではなかったのか。美穂もやはり様子がおかしい、
いったいどうなってるの

「そのまま……加奈はいない。だって私が殺したんだから」

「えっ」

美穂が加奈を殺した、それが事実なのか否か私を知るすべはない。
今この状況で嘘や冗談をいう意味もわからない。混乱している私に
美穂は言った。

「どうやって一人ずつ殺そうか悩んでただけどいい方向にいつて

よかったわ。麻里もおとなしく死んでね」

どうやら冗談ではないようだ。美穂は包丁を持っている。どこから出したのだろう。いや、今考えなければいけないのはそんなことではない。亜季は無事なのか、そしてどうやって美穂から逃げるかだ。残念なことに私は走るのが苦手なのだ。それに比べ美穂は陸上部どうも逃げ切れそうにない。

「なんで殺そうとするわけ？ 私達がなにかした？」
喋りながら隙をみて逃げる。単純だけどこれしか私には思いつかない。

「別に、麻里達はなににも。でも加奈はね、私の好きな人に告られてそれをふった……」

「そんなことで」

「あいつはそれを私に自慢してきたのよ。知ってたくせに私がその人を好きな事」

「でもそれが人を殺していい理由にはならないよ」
聞きなれた声、見ると亜季が立っていた。手には赤いリボンを持っている。

「美穂、あなたは私の大切なものを奪った」

「それは万死にあたいする。絶対許さないよ」
亜季が泣いていた。そしてかなり怒っているのも分かった。亜季が泣いている所など初めて見る、普段どんなことが起こっても泣いたりしなかった亜季が、私は……涙など出てこなかった。

「私の知ったことじゃないわ。そうね、まず亜季から殺してあげる。あの世で加奈と思い出話に花でも咲かせてなさい」美穂が亜季に向って包丁を突き出す。私はそれを止めに動くことができなかった。震えがとまらない。

「うるさいよ……」

先ほどとは違い静かな声だった。亜季はいとも簡単に包丁をかわすとそのまま美穂を投げ飛ばした。

「うそ」

私はただ茫然とその光景を眺めてしまう。

「っ」

美穂は驚きと痛みで包丁を手放している。

「この程度じゃ治まらない」

亜季はさらに攻撃を繰り返した。美穂は全く抵抗できないまま亜季に殴られていた。

「……」

私は止めに入ることができなかった。まだ体が震えている。そんな奴は警察に突き出せばいい。亜季を止めなければいけない、頭では分かっていた。でも動けない

そのうち美穂はピクリとも動かなくなった。しかし、亜季はまだ攻撃している。このままでは美穂は死ぬかもしれない。そうすると亜季は警察に捕まってしまう。それだけは避けなければいけない、加奈に続き亜季までいなくなつては寂しすぎる。

「……亜季、もうやめなよ」
体は動かないので言葉で止めるしかない。亜季は私の言葉に反応しなかった。

麻里ちゃん、そんなんじゃ今のあの子にはとどかんよ。ほんとうにあの子が大切なら無理やりにも止めなさい。

「誰？」

聞き覚えのあるどこか懐かしくやさしい声だった。震えが止まっていくな。亜季を止めなければ。ゆつくりと歩いて亜季に近づくと、そして私は亜季のほつたを思いっきり叩いた。

「そんなことしても加奈は帰ってこない。こんな奴のせいで亜季までいなくなるのは寂しすぎるよ」亜季を抱きしめる。私は自分が泣いていることに気付く。涙なんてもう枯れたと思っていたのに……

後の事はすべて警察に任せることにした。話を聞くと実は警察の方でも美穂を疑っていたらしく家に帰ってくるのを待っていたらしい。あと正当防衛ということで亜季は何も罪に問われないみたいだ。本当によかった。亜季が持っていたリボンあれはやはり加奈の物だった。亜季の話では猫についていたらそこに加奈のリボンが落ちていたらしい。そしてその先には加奈の死体があったそうだ。だから亜季は大分怒っていたのだろ、なんであんなに強かったのか聞く鍛えてるからとだけ答えてくれた。私と亜季があった時加奈はもう死んでいたらしいのであれば幽霊？もしくは幻覚？そういえばあの声。あれは……

私は知っている。あの声の持ち主を……私はこの件で幽霊を信じてみる気になった。私はあの日確実に加奈に会ったわけだし、しっ

かり声も聞いた。そして、背中を押してくれたあの声も……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1629m/>

招き猫（改）

2010年10月30日13時25分発行